

## 悪役としてのManstonを再考する 『窮余の策』における女性の願望/欲望とセンセーション

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 鈴木 淳  |
| 雑誌名 | 試論  |
| 巻   | 54  |
| ページ | 21-35   |
| 発行年 | 2021-01-30  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10097/00131827">http://hdl.handle.net/10097/00131827</a> |

## 悪役としての Manston を再考する —『窮余の策』における女性の願望 / 欲望とセンセーション—

鈴木 淳

序

トマス・ハーディ (Thomas Hardy) が第一作目の長編小説『窮余の策』 (*Desperate Remedies*, 1871) において、当時流行していたセンセーション小説を意識していたことはよく知られている。<sup>1</sup> だが、ハーディが意図するセンセーションがどのようなものなのかについては、意見が分かれる。以前の多くの批評では、テキストにおいて世界がモラルによる基準を失い、出来事が偶然性によって左右されることがハーディのセンセーションであると論じられた。<sup>2</sup> 近年では、リチャード・ネメスヴァリ (Richard Nemesvari) が、ヒーローのアイデンティティの回復の物語における「不安定かつ抑圧的な男性性」をセンセーションとして論じている。

ネメスヴァリは、男性たちがヒロインの立場の弱さを利用することを指摘し、そこに男性性の不安定さを見ている。しかしながら、本当にテキストにおいてヒロインは男性たちに利用されているのだろうか。本論では、その問題とも関連して、ハーディが意図するセンセーションとして、テキストに登場する女性たちのさまざまな形で描かれる願望や欲望に注目してみたい。<sup>3</sup> かつてリン・パイケット (Lyn Pykett) は「他者の欲望を操作し、自らも欲望を持つ女性」(204) をセンセーション小説の特徴と述べたが、本論では、それがテキストで展開される男性たちの物語に影響を与えていることを考察していく。その際には、メアリー・リマー (Mary Rimmer) が指摘する、ハーディ小説の登場人物たちの「巧妙さ」という観点からも問題を考えていく。リマーは、ハーディ小説には多くの策略を用いる人物たちが登場することを論じている。さらに、女性の策略という観点から考えた場合、リサ・スターンリーブ (Lisa Sternlieb) の論も重要である。スターンリー

ブは論の中で女性が語り手である物語の性質を論じているが、その女性特有の願望のあらわれ方は、語り手ではないものの、「自身の物語を構築する」という点でハーディのヒロイン Cytherea にもあてはまるとされる。

そのように考えた場合、ハーディの『窮余の策』で起こる一連の出来事について見直す必要が出てくる。テキストでは、一見すると男性たちが願望や欲望の主体として行動しているように見えるが、実は彼らは女性たちのさまざまな願望や欲望による計画や策略によって動かされているのではないだろうか。

本論では、上記の問題を、これまではゴシック小説の悪役とみなされてきた Manston に注目することで考察したい。テキストでは、Manston は悪役として提示されるが、分析してみると、その行動の多くは Manston がはじめから望んでいたわけではないことが分かる。むしろ、それらは女性たち自身のそれぞれの願望や欲望によって結果的に導かれたものなのだ。

以下では、Manston の母 Miss Aldclyffe、Manston の妻 Eunice、ヒロイン Cytherea、そして Manston が犯罪を隠すために利用しようとした Anne Seaway という4人の女性に注目して、それぞれの願望や欲望が Manston の物語にどのように影響するのかを確認していく。最終的にはセンセーション小説が女性たちの願望や欲望の表出の場であり、その中では男性たちの物語はむしろ二義的なものになっていることを明らかにし、それをハーディのセンセーションとして結論付けたい。

## 1. 母親の計画と秘密を握る妻

Manston の考察を始める前に、ハーディが『窮余の策』の執筆にあたって、どのジャンルのテキストから、どのような点で影響を受けたのかを考えたい。『窮余の策』のプロットの成立に関してジョージ・メレディス (George Meredith) の助言が大きく関係していることはよく知られている。<sup>4</sup> 実際にハーディがどのテキストを参考にしたのかについては、マイケル・ミルゲイト (Michael Millgate) が次のように述べている。

Determined now to produce something that publishers would accept, and acting all too literally upon Meredith's advice, Hardy made of *Desperate Remedies* a heavily plotted and deliberately sensational novel involving murder, abduction, impersonation, illegitimacy, and a good deal of fairly explicit sexuality. While he seems to have taken Wilkie Collins's *Basil*

as the model for several narrative aspects of the book, he also had *The Woman in White* very much in mind as an example of how to combine the revelation of mysteries, especially criminal mysteries, with effects of melodramatic horror, especially as involving physically or psychologically threatened heroines. (Millgate 108)

ミルゲイトによれば、ハーディは、『窮余の策』の執筆においてウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins) の『バジル』(*Basil*, 1852) と『白衣の女』(*The Woman in White*, 1860) を念頭においていた。どちらも、殺人や誘拐、監禁などの多くのゴシック物語の要素を取り入れたセンセーション小説である。

ミルゲイトは述べていないが、実は、ハーディの Manston と『白衣の女』に登場する悪役 Sir Percival には共通点があり、それを考察することで二人についての見方が変わってくる。それは、二人ともゴシック小説の特徴の一つである「家庭の秘密」によって人生を翻弄されることである。<sup>5</sup> Sir Percival は母親のスキャンダラスな過去の秘密を隠すために両親の結婚証明書を改ざんしていた。実は Sir Percival は私生児であり、それが明るみに出ると地位も財産も失う。そのために、Sir Percival は保存されている結婚記録文書の空白部分に両親の結婚記録を書き加えたのである。

ハーディの『窮余の策』でも、Miss Aldclyffe の過去のスキャンダラスな秘密が Manston の人生に影響を及ぼす。だが、ハーディのテキストがコリンズのテキストと大きく異なるのは、『窮余の策』の場合には母親が生きていて、しかも、母親自身が、自分の計画のために、それまで隠されてきた秘密を掘り起こす点である。

父親の死後に屋敷の女主人となった Miss Aldclyffe は、ある決心をする。

“Yes,” she said aloud. “To get *him* here without letting him know that I have any other object than that of getting a useful man – that’s the difficulty – and that I think I can master.”  
(*Desperate Remedies* 97)

ここで言及される「彼」とは、かつて父親の命令で無理やり捨てさせられた私生児の息子 Manston のことである。Miss Aldclyffe は、父親の死により財産権が自分に移ったことで、過去の償いとして、Manston には知らせないまま、屋敷と財産を Manston に相続させようと計画する。

その計画の手始めとして、Miss Aldclyffe は、屋敷の執事を新たに募集するという広告を新聞に出す。一度目の応募で Manston が応募してこないことを知ると、今度は Manston の住所を調べあげ、わざわざ建築家協会の封筒を使って、直接 Manston に自分の屋敷の執事の応募書類を送りつける。さらには、彼女の事務弁護士である Mr. Nyttleton が推薦する、もっと適任の候補者がいるにもかかわらず、自分で応募書類を確認し、Manston を執事として採用する。

このようにして、Manston は、母親の願望により物語の舞台に連れて来られる。ただし、この時点では、Manston は悪役ではない。では、なぜ Manston は悪役になっていくのか。それは、Miss Aldclyffe が Manston と自分が溺愛するコンパニオンである Cytherea との結婚を計画するからである。その結果、Miss Aldclyffe の計画通りに、Manston は Cytherea に愛情を持つようになる。だが、Manston は実際には既婚者であったため、良心から Cytherea への気持ちを押さえ込もうとする。

He was palpably making the strongest efforts to subdue, or at least to hide, the weakness, and as it sometimes seemed, rather from his own conscience than from surrounding eyes. Hence she found that not one of his encounters with her was anything more than the result of pure accident. He made no advances whatever: without avoiding her, he never sought her: the words he had whispered at their first interview now proved themselves to be quite as much the result of unguarded impulses as was her answer. (139)

ここからも分かるように、Manston は決して根っからの悪人ではない。しかし、Manston を悪役として読者に印象付けることになるのは、やはり自分を追いかけてきた妻 Eunice を殺害し、死体を壁に隠し、さらには、Anne に死んだ妻 Eunice のふりをさせるという一連の行動であろう。

しかし、ここでも悪役としての Manston の行為を見直す必要がある。というのは、Eunice 殺害は計画的なものではなく、偶然に起きたものであるからだ。しかも、ここで最も重要なのは、Manston による妻の殺害には、実は Miss Aldclyffe の秘密をめぐる Eunice と Miss Aldclyffe の女性同士の争いに関係していたことである。そもそも、ロンドンから妻を Manston のもとに呼ぶことになったのは、Eunice から Miss Aldclyffe に「脅迫」(154)の手紙が届いたからであった。その手紙の内容は、Eunice が過去のスキャ

ンダルを知っていて、その秘密を暴露されたくなければ、Manston と自分が一緒に暮らせるように手助けして欲しいというものだった。さらには、Manston による Eunice の殺害も、母親の秘密がきっかけとなった。

Manston は、後に獄中で書いた告白の手紙で、自分と Eunice との言い争いから始まった彼女の殺害までの経緯を次のように説明している。

Her first words were reproof for what I had unintentionally done, and sounded as an earnest of what I was to be cursed with as long as we both lived. I answered angrily; this tone of mine changed her complaints to irritation. She taunted me with a secret she had discovered, which concerned Miss Aldclyffe and myself. I was surprised to learn it – more surprised that she knew it, but concealed my feeling. (364-5)

Manston の目の前に火事で焼け死んだはずの Eunice が再び現れる。その際、Eunice は Manston を責めたあげくに、秘密を持ち出して Manston を罵倒した。そのことが Manston による殺人を誘発したのである。

An indescribable exasperation had sprung up in me as she talked – rage and regret were all in all. Scarcely knowing what I did, I furiously raised my hand and swung it round with my whole force to strike her. She turned quickly – and it was the poor creature's end. By her movement my hand came edgewise exactly in the nape of her neck – as men strike a hare to kill it. The effect staggered me with amazement. The blow must have disturbed the vertebrae: she fell at my feet, made a few movements, and uttered one low sound. (365)

こうして、テキストにおいて Manston は殺人を犯した犯罪者となる。しかしながら、確認したように、Manston による殺人は、本人によって計画されたものではなく、Miss Aldclyffe の秘密とそれを利用しようとした Eunice の女性同士の争いによって間接的に導かれたものであった。Manston を中心にしながらも、実際に願望や欲望を持って行動したのは二人の女性たちである。その結果、Manston は殺人者となった。

## 2. Cytherea の想像とゴシックのヒロイン願望

テキストで悪役 Manston を作り上げているものとして、次にヒロインである Cytherea について考察したい。まず始めに、一般的にセンセーション小説に登場するヒロインがそれまでのゴシック小説に登場していた「受動的」かつ「か弱い」ヒロインとは異なっていることを確認したい。そこに登場する多くは、エミリー・アレン (Emily Allen) が述べるように、セクシュアリティや野心を持ち、欲しいものを手に入れるために行動する女性たちである。

Sensation fiction is full of women who somehow refuse the angelic role: powerful women who take charge and sometimes multiple husbands; manly or androgynous women; sexually beguiling women; and ambitious and ruthless women who will stop at nothing to get what they want.

(Allen 404)

センセーション小説のヒロインたちは、それまで女性に想定されていた犠牲者としての役を拒絶する。パトリシア・インガム (Patricia Ingham) は、『窮余の策』のテキストのイントロダクションの中で、Cytherea についても同様にセクシュアリティの要素を指摘する。それは、嵐の場面で Cytherea が Manston の弾くオルガンの音に魅了されることに表れているとされる。

She was swayed into emotional opinions concerning the strange man before her; new impulses of thought came with new harmonies, and entered into her with a gnawing thrill. A dreadful flash of lightning then, and the thunder close upon it. She found herself involuntarily shrinking up beside him, and looking with parted lips at his face. (*Desperate Remedies* 132)

インガムによれば、オルガンの「音楽は抱擁の代わり」である (Ingham xvi)。その結果、Cytherea は Manston の持つ性的魅力に魅了され、まるで「催眠術にかかった」(*Desperate Remedies* 133) ようになる。

ここからのみ判断すると、Cytherea も、センセーション小説に登場する他のヒロインたちと同じように、セクシュアリティを持つ女性のように見える。しかしながら、ハーディのセンセーション小説のヒロインについて興味深いのは、テキストでは、インガムも述べるように、一時的な興奮が

落ち着くと、Cytherea が Manston による誘惑を恐ろしいと感じ、Manston に会う約束を取り消すことである (Ingham xvi)。さらに、Cytherea は、Manston の恋愛感情を動物的なものとみなし、Manston との接触を恐れるようになる。

For the first time in her life she truly dreaded the handsome man at her side who pleaded thus selfishly, and shrank from the hot voluptuous nature of his passion for her, which, disguise it as he might under a quiet and polished exterior, at times radiated forth with a scorching white heat. She perceived how animal was the love which bargained. (*Desperate Remedies* 213)

その後も、Cytherea は、自分との結婚のためにさまざまな策を企てる Manston を自分に危害を加えようとする悪役であるかのように見なすようになる。すなわち、ここからわかるのは、ハーディが描いた Cytherea は、他のセンセーション小説に登場するヒロインとは異なり、むしろセンセーション小説のヒロインたちが拒絶しようとしていた犠牲者としての特質を備えていることである。実際に、兄 Owen の病気治療のために金銭的な支援が必要になった Cytherea は、Manston を結婚相手として受け入れざるを得なくなる。Owen までもが Manston との結婚を説得にかかり、その結果、Cytherea は「自己犠牲」(219) の精神から Manston との結婚を決意する。

このように、テキストでは、Cytherea はセンセーション小説のヒロインというよりは、むしろ男性たちの欲望に利用される従来のような受動的かつか弱いヒロインとして提示されている。しかし、ハーディのセンセーション小説のヒロインを考えるにあたって重要なのは、この受動的でか弱いヒロインが抱いている願望や欲望が持つ力である。というのは、そのか弱いヒロインは、自分の願望を成就させるためにあえて犠牲者としての役割を利用するからである。

その問題を考えるには、リマーの言う「策略」という観点から登場人物たちの願望や欲望がどのようにテキストに表れているかを捉え直す必要がある。リマーは、ハーディのテキストに見られる「隠された活動、あるいはあることを他のこととして偽装したいという欲求」(Rimmer 273) を指摘する。さらには、その問題を女性の隠された願望や欲望として考えた場合、スターンリーブの論は重要である。スターンリーブは、女性キャラクターたちが「単に待ち続け、苦しみ、耐えているだけではなく」、「彼女た



ち自身の物語を構築している」と述べている (Sternlieb 4)。

実際に、ハーディのテキストにおいても、Cytherea は Manston によって苦しめられる一方で、常に頭の中ではかつての恋人 Springrove という存在を描いていた。したがって、Manston との結婚が決まった際にも、土壇場になって Manston との結婚を邪魔して、Springrove との恋愛を可能にしてくれる何かが起きることを願っているのである。

[...] even now she nourished a half-hope that something would happen at the last moment to thwart her deliberately formed intentions, and favour the old emotion she was using all her strength to thrust down.

(*Desperate Remedies* 220)

そのような隠された願望を持っていた Cytherea が描いていたのは、ゴシック物語のプロットである。ゴシック物語では、ヒロインは暴力的な悪役男性に捕らえられるが、最終的にはヒーローによって救出される。そのように考えると、テキストで何度も Cytherea には空想癖があったと語られることは非常に重要となってくる。その「ロマンティックな想像」(23)について、テキストの前半部分では、Cytherea が自分の左手の薬指を見ながらそこに指輪を想像し、自分の将来の結婚相手が誰であるのかを夢想していることが語られる。また、Springrove とボートに乗っている場面では、Cytherea の空想が次のように語られる。

The boat was so small that at each return of the sculls, when his hands came forward to begin the pull, they approached so near to her bosom that her vivid imagination began to thrill her with a fancy that he was going to clasp his arms round her. (42)

Cytherea は、終始テキストにおいて自分の理想の男性とのロマンティックな恋愛を思い描く。そこには彼女の積極的なヒロイン願望を確認することができる。

さらに、Cytherea をゴシック物語のヒロインとして考えるならば、Cytherea が初めて Miss Aldclyffe の屋敷を訪れたときの召使いとの会話の理由がはっきりと分かってくる。Cytherea は、屋敷にまつわる恐ろしい逸話がないかどうかを尋ね、一つもないと分かると残念がるのである。

“Well ’tis so awkward and unhandy. You see so much of it has been pulled down, and the rooms that are left won’t do very well for a small residence. ’Tis so dismal, too, and like most old houses stands too low down in the hollow to be healthy.”

“Do they tell any horrid stories about it?”

“No, not a single one.”

“Ah, that’s a pity.”

“Yes, that’s what I say. ’Tis just the house for a nice ghastly hair-on-end story, that would make the parish religious. Perhaps it will have one some day to make it complete; but there’s not a word of the kind now. There, I wouldn’t live there for all that. In fact I couldn’t. Oh, no, I couldn’t.” (60)

ここからは、Cytherea が新しい生活にゴシック物語の展開を期待していたことを読み取ることができる。このように、Cytherea は、はじめから自身をゴシック物語のヒロインとして想像する傾向があった。

そのように考えると、Manston は Cytherea が思い描くゴシック物語の悪役として適任だった。兄 Owen のために自己犠牲の精神から Manston との結婚を受け入れた後、Cytherea は Manston から暴力を受ける夢を見る。また、Cytherea は、Manston が自分を殺害するのではないかと恐れる。

“Suppose he should come in now and murder me!” This at first mere frenzied supposition grew by degrees to a definite horror of his presence, and especially of his intense gaze. Thus she raised herself to a heat of excitement, which was none the less real for being vented in no cry of any kind. No: she could not meet Manston’s eye alone, she would only see him in her brother’s company.

Almost delirious with this idea, she ran and locked the door to prevent all possibility of her intentions being nullified, or a look or word being flung at her by anybody whilst she knew not what she was. (255)

ここで注目すべきは、Cytherea が Manston に襲われる自分を想像したときに、恐怖だけでなく、Cytherea の「興奮状態」が描かれていることである。その際に興味深いのは、Cytherea が自分の想像する物語をだれにも否定されないように、私室に閉じこもることである。スターンリーブは、物語の

登場人物たちが「自身の物語を通して一定のレベルのプライバシーを創造する」(Sternlieb 15)と述べているが、Cythereaの場合も、その私室というプライベートな空間で自分だけの物語を構築していると言える。つまり、Cythereaは、単に犠牲者となっているのではなく、その状況を利用して自らの願望を成就させるゴシック物語を構築しているのである。

### 3. 男性たちの物語を動かすヒロイン

テキストでは、悪役 Manston とヒーロー Springrove との間で Manston の犯罪の調査をめぐって男性ライバル同士の争いが繰り広げられる。Manston の重婚を疑っていた Springrove は、Manston の妻 Eunice の写真を手に入れて Cytherea と Owen のもとに送る。しかし、Springrove の行動を監視していた Manston は、郵便配達員にブランデーを飲ませて酔わせることで、封筒の中の写真を入れ替えることに成功する。これによって妻 Eunice と現在の Eunice とが別人であることを知られるのを避けることができる。だが、Manston は、Springrove がもう一通の手紙で Manston が作った Eunice に関する詩を送っていたことには気がつかなかった。しかし、Springrove 自身はその詩の持つ重要性には全く気が付いていない。

このように、悪役 Manston との対決において、Springrove はヒロインを救う理想的なヒーローとしての十分な資質を備えているとは言い難い。もし、Springrove や Owen だけで行動していたならば、おそらく Manston の本当の秘密は隠されたままだっただろう。一方で、Cytherea だけが詩の中の Mrs. Manston の目に関する表現と写真の目の色が違うことに気が付き、現在の妻が Eunice 本人ではなく、家政婦である Anne Seaway によるなりすましであることが明らかになる。

この点において、Cytherea は従来のゴシック物語、そしてハーディが影響を受けたとされるコリンズなどのセンセーション小説に登場する受動的なヒロインたちとは異なる。たとえば、コリンズの『白衣の女』では、アレンも述べるように、ヒロインである Laura は悪役たちによる策略の犠牲者だった。

The beautiful Laura Fairlie is every inch the proper woman and she spends most of the novel having things done to or for her. (She is kidnapped, incarcerated, rescued, vindicated, etc.) She never narrates or drives the story; her passive femininity is the sort of narrative blank over which other people compose it. (Allen 405)

コリンズのテキストのヒロイン Laura は悪役 Fosco や Sir Percival によって監禁され、ヒーローである Walter Hartright に救出されるというように、男性中心の物語の中で人生を左右される存在だった。一方で、ハーディのテキストのヒロインである Cytherea は、犠牲者でありながら、悪役男性のトリックを見破ることで、男性たちの物語を動かし、結果的には、それまでは不完全だった Springrove のヒーローとしてのアイデンティティの確立を助けることになる。それはまた、Cytherea が男性中心の物語の中で自分の願望であるゴシック物語を完成させていることを意味していた。<sup>6</sup>

#### 4. 女性の好奇心による探偵物語

最後に、悪役 Manston について、もう一人の女性の願望との関係で考えてみたい。その女性の願望とは、Manston が自分の犯罪を隠すために利用していた Anne Seaway の「好奇心」である。Anne は Manston の若い頃の知り合いで、ロンドンのある貴婦人の家政婦をしていた。しかし、その貴婦人が亡くなり暮らしに困っていたところを Manston に話を持ちかけられ、Anne は Eunice のふりをするようになったのである。

従来のセンセーション小説であれば、犯罪の共犯者は自分が加担している犯罪がどのようなものなのかをはじめから知っていた。たとえば、『白衣の女』の Sir Percival の共犯者である Mrs. Catherick は、Sir Percival が両親の結婚証明書を偽造したことを黙っている見返りにさまざまな賄賂を手に行っていた。Mrs. Catherick は、Hartright への手紙の中で、自分が手伝ったことが犯罪だとは知らなかったと述べ、Sir Percival に騙され、脅迫されていたと主張しているが、いずれにしても、犯罪の共犯者は主犯の悪役の犯罪の秘密を共有し、隠し続けていた。

しかしながら、ハーディのテキストの場合に重要なのは、Anne がなぜ自分が Eunice のふりをしなければならないのかを知らないままだということである。当然ながら、Anne は、Eunice が Manston にすでに殺されていたことも知らない。したがって、「好奇心」から Anne は Manston に対して執拗に Eunice の居場所や自分を連れてきた動機を聞き出そうとするが、Manston は答えようとしない。その結果、Anne は Manston が何か重大な秘密を隠しているのではないかと思い、Manston の留守中にキャビネットの中の Manston と Eunice の手紙を調べ始める。

二人の手紙を調べるうちに、Anne は Eunice が火事では死んでいないことを知る。しかしながら、Manston は Eunice が火事で死んだと言ってい

て (*Desperate Remedies* 322)、また周りの誰にも Anne が Eunice 本人ではないことを絶対に知られてはならないと言う (325)。こうしたすべてのことから考えて、Anne は自分が犯罪に巻き込まれているのではないかと疑い、Manston を恐れるようになる。

The man's strange bearing terrified Anne as it had terrified Cytherea; for with all the woman Anne's faults, she had not descended to such depths of depravity as to willingly participate in crime. She had not even known that a living wife was being displaced till her arrival at Knapwater put retreat out of the question, and had looked upon personation simply as a mode of subsistence a degree better than toiling in poverty and alone, after a bustling and somewhat pampered life as housekeeper in a gay mansion. (333-4)

引用部分からも分かるように、Anne は Manston の共犯者になるつもりはない。Anne が Manston の計画に協力したのは、困窮した生活よりもましだと思ったからであって、Mrs. Catherick のように賄賂欲しさに進んで犯罪に加担するところまで堕ちてはいない。したがって、Anne は悪役の犯罪を隠し通そうとするのではなく、逆にそれが何なのかを暴き出そうとするのである。この点が、コリンズのセンセーション小説に登場する女性の共犯者とは異なっている。

こうして、Anne の好奇心により、テキストは Manston の犯罪を捜査する探偵小説の性格を帯びる。場合によっては、Anne 自身も被害者になる可能性がある。実際に、Anne は、Manston がワインに何かを入れたとき、自分を毒殺しようとするのではないかと疑う。だが、Anne は、Manston が自分を眠らせたいのだと考え直し、ワインをハンカチと胸元から服にしみ込ませることで飲んだふりをする (343)。

その後、Manston が出かけると、バルコニーを使って外に抜け出した Anne は、Manston を尾行する。<sup>7</sup>そして最後に、Anne は、同じタイミングで Manston を追っていた捜査官に協力しながら、壁のかまどに隠された Eunice の死体を発見する (351)。

犯罪を隠すために利用されていた Anne は、逆に Manston の殺人の罪を露見させる。Eunice の死体が見つかった瞬間、Anne の中でそれまでの出来事や Manston の行動の動機が一気につながり、Anne はすべてを理解する。そのときの反応を見ていた捜査官により、Anne は共犯者として逮捕される

が、彼女自身は殺人に関わっていない。

Anne が Eunice 殺害の実際の共犯者ではないことは、のちに Manston が獄中で書いた告白の最後で述べられ、その結果、Anne の疑いは晴れる。こうして、Anne の探偵物語は、Manston の犯罪の暴露と自らの潔白の証明で幕を閉じる。一方、Manston の犯罪の隠蔽の失敗は、従来のセンセーション小説の悪役のように共犯者と秘密を共有しないことで、女性の好奇心を生じさせてしまったことにある。それは大きく膨れ上がり、男性の物語の内側から反乱を起こし、ついには隠されていた秘密を暴露した。ハーディのセンセーション小説では、従来は利用されるだけであった女性の共犯者が好奇心を持ち、それは悪役男性の物語の目的にとって大きな脅威となるのである。

## 結論

テキストの最後は、Manston との闘いに勝つことでヒーローとして成長した Springrove とヒロイン Cytherea の結婚で終わる。一方、Manston は牢獄に入れられる。従来の批評では、悪役 Manston の自殺という結末に対して何の疑問も提起されることはなかった。

しかし、本論では、これまで疑われることのなかった悪役としての Manston の描かれ方を女性登場人物たちに焦点を当てて分析し直すことで、Manston がそれぞれの女性の願望や欲望による巧みな仕掛けによって結果的に悪役になっていったことを明らかにした。そのように考えると、Manston の告白の手紙の次の部分は注目に値する。

“HAVING FOUND man’s life to be a wretchedly conceived scheme, I renounce it, and to cause no further trouble, I write down the facts connected with my past proceedings. (364)

Manston の人生は、女性たちの計画や策略によって翻弄されていた。逆に、Manston の計画はすべて失敗した。その結果、Manston は自分の思い通りにならない人生を放棄し、牢獄で自殺した。

リマーが述べるように、「ハーディは登場人物たちの巧みな策略に明らかに関心を持っていた」(279)。しかも、本論で確認したように、『窮余の策』では、策略を自分の思い通りに実行していたのは男性たちよりも女性たちであった。つまり、ハーディは、それまでは犠牲者とみなされていた女性

たちの願望や欲望による策略をテキストの中の出来事を左右する力として描いたのである。その結果、読者は、テキストで提示された男性の物語の中に、それ以上に常に女性たちの願望や欲望の物語の存在を感じざるを得なくなるのである。

## 注

\*本研究は、2013 年～2015 年に JSPS 科研費 (25770112) の助成を受けた研究成果の一部である。また、本稿は、日本英文学会第 90 回全国大会（於：東京女子大学 2018 年 5 月 20 日（日））において、「何が Manston をゴシックの villain にしたのか？—『窮余の策』における女性の願望のプロット—」と題して行った口頭発表の内容に加筆・修正したものである。

<sup>1</sup> ノーマン・ページ (Norman Page) が編纂した *Oxford Reader's Companion to Hardy* では、『窮余の策』に関して、「センセーション小説やゴシックロマンス、そして探偵小説のような大衆的サブジャンルのモード展開」により、「批評的には正当な評価を受けてこなかった」と記されている (84)。

<sup>2</sup> 偶然性をハーディのセンセーションとする批評には、ウィニフレッド・ヒューズ (Winifred Hughes) によるものがある。また、同じく『窮余の策』の中の偶然性に言及した批評については、アンドリュー・ラドフォード (Andrew Radford) が *Victorian Sensation Fiction* の「センセーションの変容」と題した章でいくつかの先行研究について触れている。

<sup>3</sup> 「願望」についての先行研究には、他にはジェイン・トマス (Jane Thomas) によるものがあるが、そこでは Miss Aldclyffe と Cytherea の間の女性同士の絆について論じられている。

<sup>4</sup> フローレンス・エミリー・ハーディ (Florence Emily Hardy) による *The Early Life of Thomas Hardy, 1840-1891* では、1869 年に、メレディスは、ハーディが未出版である『『貧しい紳士と淑女』 (*The Poor Man and the Lady*) で試みたよりも複雑なプロットを備えた純粹に芸術上の目的を持った小説を書く』ようにアドバイスしたと記されている (82)。

<sup>5</sup> アン・ウィリアムズ (Anne Williams) は、ゴシックの中心的特徴として「恐ろしい秘密を抱えた壮大な屋敷」を挙げている (39)。

<sup>6</sup> リマーは、ハーディの『エセルバータの手』 (*The Hand of Ethelberta*, 1876) のヒロイン Ethelberta と比較して、Cytherea が「策略の中で主に受動的である」(274) と述べる。しかしながら、男性主人公を自分の理想のヒーローへと導いていくことを考えると、Ethelberta 同様に、Cytherea も「自分自身の人生についての構想を立てている」(Rimmer 274) と言える。

<sup>7</sup> バルコニーから外に抜け出すという点では、Anne はコリンズの『白衣の女』の Marian に類似している。

## Works Cited

- Allen, Emily. "Gender and Sensation." *A Companion to Sensation Fiction*, edited by Pamela K. Gilbert, Wiley-Blackwell, 2011, pp. 401-13.
- Collins, Wilkie. *The Woman in White*, edited by Matthew Sweet, Penguin Classics, 2003.
- Hardy, Florence Emily. *The Early Life of Thomas Hardy, 1840-1891*. Cambridge University Press, 2011.
- Hardy, Thomas. *Desperate Remedies*, edited by Patricia Ingham, Oxford University Press, 2009.
- Hughes, Winifred. *The Maniac in the Cellar: Sensation Novels of the 1860s*. Princeton University Press, 1980.
- Ingham, Patricia. "Introduction." *Desperate Remedies*, edited by Patricia Ingham, Oxford University Press, 2009, pp. ix-xxvi.
- Lisa Sternlieb. *The Female Narrator in the British Novel: Hidden Agendas*. Palgrave Macmillan, 2002.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy: A Biography Revisited*. Oxford University Press, 2006.
- Nemesvari, Richard. *Thomas Hardy, Sensationalism, and the Melodramatic Mode*. Palgrave Macmillan, 2011.
- Page, Norman, editor. *Oxford Reader's Companion to Hardy*. Oxford University Press, 2000.
- Pykett, Lyn. "Sensation and the fantastic in the Victorian novel." *The Cambridge Companion to the Victorian Novel*, edited by Deidre David, Cambridge University Press, 2001, pp. 192-211.
- Radford, Andrew. *Victorian Sensation Fiction: A Reader's Guide to Essential Criticism*. Palgrave Macmillan, 2009.
- Rimmer, Mary. "Hardy's "Novels of Ingenuity" *Desperate Remedies*, *The Hand of Ethelberta*, and *A Laodicean*: Rare Hands at Contrivances." *A Companion to Thomas Hardy*, edited by Keith Wilson, Wiley-Blackwell, 2009, pp. 267-80.
- Thomas, Jane. *Thomas Hardy and Desire: Conceptions of the Self*. Palgrave Macmillan, 2013.
- Williams, Anne. *Art of Darkness: A Poetics of Gothic*. The University of Chicago Press, 1995.